れいわ新選組機関誌

れいわPRESS

第6号

2025年5月10日発行

木村英子議員を水道橋博士がインタビュー！

れいわ新選組所属議員、魂の国会質問

第3弾

上村英明、木村英子、くしぶち万里、高井たかし、舩後靖彦、山川ひとし、山本太郎

議員めし Vol.4 たがや亮

https://reiwa-shinsengumi.com/

参議院議員 木村英子が語る 施設から地域へ そして国会へ ―(前編)―

インタビュアー
水道橋博士

幼少期のほとんどを障害者施設と養護学校で過ごしてきた、木村英子議員。今回、改めてその半生をふりかえると共に、6年の議員生活の中で感じた気づきについて、インタビュアー・水道橋博士が深く掘り下げる。

二度と施設には戻りたくない

博士　木村さんとは何度もお会いしていますが、じっくりお話したことがほとんどありませんでしたね。

木村　そうですね。ずっとお話したかったです。

博士　僕は、れいわの議員の先達への畏敬と感謝があります。恥ずかしながら、僕自身が国会議員を志すときに、れいわの障害者支援が政策として咀嚼できてなくて。でも、父が要介護5で7、8年寝たきりだったんですけど、田舎の兄が全部面倒を見ていたので自分の中に実感がなくて。社会がバリアフリー化していく過程は見てきましたが、実際に運動されてる人の足跡、実績を法律的に見たことがなかったんです。

木村　私は逆に、法律を変えるっていうイメージが湧かなかったし、これまで行政交渉はしてきたつもりですが、政治の世界とはほとんど関わったことがなかったので日々勉強になっています。ただ、私ほど重度な障害者は、介護してくれる人がいなければ、すぐ施設に入れられちゃう社会環境なので、1人でも多くの障害者が生きやすいように、施設や親元から離れて地域に出られるようになればいいなという思いで活動しています。

博士　よくぞ18歳で社会に出る決意をされましたね。

木村　私は1歳頃から施設に入って、障害者だけの世界で暮らしていたんですけど、二度と施設には戻りたくないという気持ちがあります。親とも離れているし、ある意味虐待とかも受けてきたので。

博士　虐待ってあるものなんですか？

木村　多かれ少なかれ、どこでもあると思います。例えばトイレに行くのが遅くておもらししちゃった場合にご飯抜きとか、ボイラー室に閉じ込められるとか、お尻をたたかれるとか。

博士　ひどいですね……。

木村　職員さんは初めから意地悪をしようと思っているわけではないんです。ただ、職員同士の新人いじめなどもありますし、過重労働などもあり、どんどん怖い職員になっていく姿を子ども心に見てきたので。施設っていうのはとても怖い場所ですから、帰りたくないですね。

自分のことを、迷惑な存在だと思っていた

博士　いつ頃から施設の外に出たいと思ってました？

木村　高校生のときですかね。80年代の初め、障害者が地域で自立生活をするための運動を知って、そういう人たちの手記を読んだりしながら、自分にも外に出る権利はあるんだということを知りました。

博士　自分に権利が宿るって、教えてもらわないと気が付かないかもしれませんね。

木村　小さいときから親から「おまえはカタワなんだから、人さまの迷惑にならないように、とにかく好かれる子でいなさい。謙虚でいなさい」と言われて育ってきたので、高校生くらいまで自分のことを、人に迷惑な存在なんだ、この世に生まれてくる意味があったのかな、と思って生きてきて。だけど、障害があっても、健常者と同じように権利を主張していいんだってことを地域生活を実現している障害者の先輩方から学びました。

博士　どんな先輩がいたんですか？

木村　国立のかたつむりの会の三井絹子さんが70年代に、府中療育センター闘争というのをやっていて。そこで闘ってきた人が、国立市で自立の家という活動を始めまして、私は85年にそこを訪ねて、自立のノウハウを教わりながら、地域に出ていきましたね。

博士　お仕事にも就かれたんですか。

木村　いえ、重度障害者にとって就労っていうのは一番遠い権利だったりするんですよ。

きむら・えいこ
1965年生まれ。養護学校を卒業後、19歳で地域での自立生活を始める。全国公的介護保障要求者組合の書記長などを務め、長年にわたり仲間と共に障害者運動を行う。

働く場所もないし、雇ってくれる人もいない。まず、地域に出るには介護してくれるボランティアの方が必要で。当時はそういう制度が整っていなかったので、街角に立って、ボランティア募集のビラをまいて、今日のトイレを誰に手伝っていただくのか、と探して……。生活費は、生活保護と障害基礎年金を受けていました。

博士　もし介護してくれる人がいなくなったら、と妄想するとすごく怖いですよね。

木村　はい、それは今でも怖いです。だけど自立生活40年、数え切れない方々がバトンリレーのように私の命を支えてくれましたね。

博士　例えば、介護の方が寝坊して来なかったり、ということも？

木村　ありますね。駅で一晩待っていてもいらっしゃらなかったときも。1人で家に入れないので車いす用電話ボックスの中で雨風をしのいだり……。80年代は携帯がなかったので。

博士　携帯ってすごい命綱ですね。そういう環境の中でだんだんと強くなっていき、運動を始められたのですか？

木村　そうですね。実際に94年に自立ステーションつばさという団体を立ち上げて、近隣の特別支援学校から、自立の練習をしに来る生徒さんたちを招いて、一緒に訓練しながら、地域へ送り出すという活動をずっとしてきました。

議員になるのは嫌でした（笑）

博士　その流れの中で山本太郎代表と出会うんですか？

木村　そうですね。全国公的介護保障要求者組合という組合で、行政交渉を行ううちに山本太郎さんと出会いました。

博士　山本太郎代表の慧眼だと思うんですけど、議員になるには相当の決意が必要だったかと思います。

木村　そうなんですよ。本当、冗談じゃないっていうくらい嫌でした（笑）。実は19年の参議院選の前に、衆議院選挙があったときに、もしチャンスがあれば、ぜひ出てもらえませんかとお話はいただいていて。なんで私が!?　って感じでした。議員って、バッシングの嵐というイメージじゃないですか。自分が耐えられるのかなって。

博士　そうですよね。公人となれば、何を書かれても仕方ないし、全ての行動を律してやらなきゃいけないですからね。

木村　私自身あんまり社会常識を知らないし、不安でした。それを突き動かしてくれたのは、山本太郎さんの真剣な思い。障害があっても、そういう人たちが地域で生きられる保障を、当事者の立場からやってほしいという、彼の正義感に感銘を受けました。

博士　すごいですよね。そういう選出をすることによって、山本太郎代表も批判の対象になっていくかもしれないし。

木村　だって、外から見たら偽善者じゃないですか。そういうふうに見られて大丈夫ですか？　って逆に聞きました。「いや、大丈夫ですよ」って答えられたので、強い人だなと思いましたね。

博士　それでお返事をしたんですか？

木村　いや、ぎりぎりまでお断りしようかなって思っていたんですけど、今まで障害者運動をしてきて、重度訪問介護の単価アップや、時間数を広げるとか、どんな人でも受けられるようにといった運動はしてきたけれども、やっぱり進み方が遅いですし、これ以上、本当にこの制度が良くなっていくのか？　っていうのが見通せなかったので。政治の世界に行って、法律を変える直接の場所に行けるチャンスが、もし太郎さんからもらえるなら、そこに行かないとこれ以上良くならない。仲間たちからも、何とかして行ってくれって背中を押されたのが一番大きいですね。

博士　すばらしいですね。議員になると、委員会の数が半端ないじゃないですか。僕はそれを知らなくて、正直、つまずきましたね。

木村　私も訳がわからなかったです。私の場合、特定枠を使って受かったじゃないですか。太郎さんが落ちて、私と舩後靖彦先生だけになって、親がいない子どもみたいになっちゃって本当に不安でした。

博士　委員会質問とか最初から慣れました？　れいわって少数政党なので委員会では一番最後に発言するじゃないですか。僕、芸人なのでネタがかぶるとか、トリが一番受けなきゃいけないっていうのが、染み込んでるんですよね。だから、周りの人がなんのネタを仕込んできてるんだろうって気になって。ネタかぶりがないか官僚に聞いても教えてくれないんですよ。議員を辞めてから中条きよし（参院議員・日本維新の会）氏が参院文教科学委員会で新曲の宣伝をしているのを見て、あんなんでいいのか！　って驚きましたね（笑）。

木村　私も最初はすごい緊張しちゃって、たどたどしくなっちゃってました。障害者関係のことであれば、自分が使っている制度なのでわかりますけど。

博士　それがすばらしいです。多くの国会議員の中に障害者はほとんどいないですもんね。まず、議員になっても法的に国会に入ることができないっていうのは驚きでしたよね。

木村　重度訪問介護では就労が認められてないので。

博士　介護を付けてもらう代わりに、就労してはいけませんよってことですよね。むちゃくちゃですよね。

（後編へ続く）

すいどうばし・はかせ
1962年生まれ。漫才師、著述家、ブロガー、YouTuber、元参議院議員。2022年参議院選挙に立候補し3カ月後、鬱病により国会議員を辞任した、その姿を描いたドキュメンタリー映画『選挙と鬱』が6月28日公開。

れいわ新選組所属議員たちの魂の国会質問

～3月4日から13日まで～

第3弾

れいわの議員が多すぎて
誰がどんな質問をしているのか
チェックするのが大変! というあなたに――。

2025年1月24日に開会した通常国会より、れいわ新選組に所属する議員たちが発言した注目の国会質疑を要約してピックアップ！　第3弾の今回は、7項目の質疑を、写真と共に紹介します。

1

衆議院議員 くしぶち万里（まり）

2025年3月4日 衆議院予算委員会・本会議

介護報酬引き下げで事業者の倒産は過去最多。
介護人材25万人不足が迫っているなか、
「介護・保育労働者の賃上げ月10万円を実現せよ」と総理に迫りました。
また、お米を炊く煙がないのを見て税金を免除した『民のかまど』の逸話の通り、
「お金を取るな、米を配れ」と強く求めました。

自民、公明、維新の「冷酷三兄弟」は、医療費４兆円削減で国民を地獄の底に突き落とす。今後、「鬼」と呼びます。

くしぶち・まり
1967年群馬県沼田市出身。れいわ新選組共同代表、東京都第14区総支部長（墨田区・江戸川区北部）。元国際協力NGOピースボート共同代表・事務局長。

動画はこちら

衆議院議員 高井（たかい）たかし

2

2025年3月4日 衆議院本会議

今必要な税制改正は、消費税廃止、少なくとも減税。
少数与党の現下、立憲民主党がその実現の障壁になっていることを指摘し、
過ちを改めることを訴えました。
また、「誰一人取り残さない、生きているだけで価値がある、
そんな社会を実現するために、消費税廃止、季節ごとの現金給付、
社会保険料の引下げを始め、人々の暮らしを豊かにする経済政策」の実現を誓いました。

**三十年続く不況にコロナ、物価高で、
国民生活は地獄の苦しみです。三十年間経済が
成長していない国は、世界中で日本だけ。
景気が悪いときには税金を下げる。これは
中学校の公民で習う、経済学の基本のキです。**

たかい・たかし
1969年北海道函館市出身。れいわ新選組幹事長。通算国会質問回数は225回。法案提出数は119本。国会質疑衆議院議員1位。

動画はこちら

衆議院議員 山川（やまかわ）ひとし

3

2025年3月4日 衆議院本会議

今、国が過去最高の税収というのであれば、
その分はしっかりと地方に配分し、地方を元気にした上で、
この国を元気にしなければなりません。
地方に通貨発行権がない以上は、地方への支援を大胆に行うことで、
疲弊をした地方財政を底上げ、国民へ、
未来への投資を進めることじゃないかと訴えました。

**地方が元気でこそ、日本全体が
活性される。今回の地方税法等の
改正は、国の一方的な制度改正で、
地方に悪影響を及ぼします**

動画はこちら

やまかわ・ひとし
1974年、沖縄県豊見城市生まれ。れいわ新選組衆議院沖縄県第4区総支部長。沖縄県内に初となる国政政党「れいわ新選組」事務所を開所。

4 れいわ新選組代表、参議院議員 山本太郎（やまもと たろう）

2025年3月6日 参議院予算委員会

能登半島地震から430日が経過してもなお、被災地の土砂撤去が進まず、
住民の生活が困難な状況にあることを指摘。石破首相に対し、
「被災者の生活とコミュニティーを守れ！」と強く訴えました。
また、被災地の復旧復興よりも解散・総選挙を優先させ、「自衛隊派遣の拒否」を水面下で行った、
政府の対応の遅れを「鬼畜の所業」と批判。特に、県知事から自衛隊の派遣を求められても
「三要件に当たらない」と拒否した問題を追及し、迅速な復興支援を求めました。

**総理にも現場を見ていただきたい。
岩手の山火事に視察に行って
いただきたいし、能登にも
もう一度入っていただきたい。**

動画はこちら

やまもと・たろう
1974年兵庫県宝塚市出身。れいわ新選組代表。2019年4月、独自で「れいわ新選組」を旗あげ。草の根による国政政党設立へのチャレンジを始める。

5 参議院議員 木村英子（きむら えいこ）

2025年3月7日 参議院予算委員会

介護の必要な障害者は選挙に立候補できない問題について、
長年にわたり厚労省告示523号の「社会通念上適当でない外出を除く」という文言によって、
重度訪問介護制度などを利用する介護の必要な障害者の
選挙活動や政治活動が禁止されてきた。
総理に対して、介護の必要な障害者が当たり前に政治活動や選挙活動に参加できるように
厚労省告示523号の撤廃を訴えました。

**私たち障害者から、
憲法でも認められている
参政権を奪わないでください。**

きむら・えいこ
1965年生まれ。養護学校を卒業後、19歳で地域での自立生活を始める。全国公的介護保障要求者組合の書記長などを務め、長年にわたり仲間と共に障害者運動を行う。

動画はこちら

6

衆議院議員 上村英明（うえむら ひであき）

2025年3月7日　衆議院内閣委員会

水の安全と健康の権利、PFASと水道の水質基準の問題で「予防原則」に加えて
「リスク評価機関」の評価プロセスの「非科学性」について追及しました。
食品安全委員会の評価は非科学的で、行政機関への忖度が認められ、
健康被害に結び付く可能性があるので「予防原則」の適用が重要だと指摘。
健康という市民の人権を守るため、
評価プロセスのやり直しと予防原則の導入を要請しました。

**水は、生活あるいは
生命維持の基本で、
健康の権利という人権です。**

うえむら・ひであき
1956年熊本県出身。アイヌ民族や琉球民族の先住民族としての国連活動を支援。社団法人新時代アジアピースアカデミー共同代表、人権NGO市民外交センター共同代表。

動画はこちら

7

参議院議員 舩後靖彦（ふなご やすひこ）

2025年3月13日　参議院文教科学委員会

全国の大学で学費値上げが相次ぐ中、
院内集会で学生の悲痛な声を聴き「国に届ける」と決意。2025年初の文教科学委員会質疑で、
阿部俊子文科大臣に「値上げを回避するために緊急予算措置が必要」と求めました。
しかし大臣は「安定的、継続的に人材の育成と教育研究を実施できるよう支援」と
切迫感のない回答。舩後議員は文字盤を使って「必要なのは即効薬」と述べ、
国債を発行して対処すべきと訴えました。

**大学の学費値上げを撤回、
回避するために緊急予算措置が必要
と考えます。大臣、いかがですか。**

ふなご・やすひこ
1957年生まれ。2019年にれいわ新選組から「特定枠」候補として立候補し、初当選。重度障害のある人工呼吸器装着ALS患者として史上初の国会議員となる。詩歌や童話などの創作活動も行っている。

動画はこちら

れいわ新選組議員の推しグルメを紹介！

議員めし

腹が、減った…

Vol.4 たがや亮

天鳳（てんほう）ラーメン 六本木店

天鳳は、20代半ばから食べ続けているラーメン。この店の「1・3・5」と呼ばれる、「麺硬め、油濃いめ、味濃いめ」の醤油ラーメンは、西山製麺のコシのあるちぢれ麺がスープによく絡む一品。日を選ばず無性に食べたくなる。濃いスープを薄めるための半ライス（沢庵二切付）が通好み。ラーメンを啜ってはライスを流し込む。これ最強。沢庵に更なる食欲をそそらされる。是非ご賞味を。

れいわ新選組
HP はこちら

れいわオーナーズ
ご案内はこちら
あなたが、れいわ新選組のオーナーになりませんか？

ご寄附の受付
れいわ新選組は、皆さまからの寄附をお願いしております。頂きましたご寄附は、れいわ新選組が取り組んでいる政治活動、事務所運営費等に活用させていただきます。

れいわPRESS 第6号

発行・れいわ新選組　れいわPress編集部
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-5-20 押田ビル4階
TEL:03-6384-1974